

浄土

1978 - 8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特種郵便物)
昭和五十二年七月二十五日印刷

第四十四卷

第八号

昭和五十二年八月二十五日発行
定価 二五〇円



スジャータの話

世に大藏經といわれる膨大な仏教經典の中に、釈尊が前世において菩薩であった時、色色な人間や動物に生れ、人々や仲間たちを救う物語りを集めた『スジャータカ（本生譚）』と



呼ばれるものがあります。紀元前三世紀頃の成立と推定されていますが、その中に出てくる説話には現代の我々が経験するものと全く同じ人の世の喜び、悲しみ、怒り、苦しみが数多く説かれています。

その中の一つ、『スジャータ・スジャータカ』は、祖父を亡くした孫が、嘆き悲しむ父を慰めるもので、インド仏教美術の宝庫の一つ、パールフトの欄楯の浮彫りにも描かれています。「菩薩は或る時、或る居士の家に生れ、スジャータと呼ばれていた。彼が成人した時、祖父が亡くなってしまった。スジャータの父親は墓地から祖父の遺骨を持ち帰り、自分の庭に土の塔を造ってそこにおさめ、花を供えては嘆き悲しむのみで、食事も仕事も手につかぬありさまであった。スジャータは方便をもつて父の悲しみをとり除こうと考え、一頭の死んだ牛の前に坐り、草や水を与えようとした。人々は、スジャータに死んでしまった牛になぜ、草や水を与えようとするのかと尋ねたが、彼は何も答えなかった。そこで人々は彼の父親にあなたの息子は気が狂ってしまった、死んだ牛に草や水を与えようとしている

と告げた。父親は驚ろいて息子になぜかようなことをするのかと尋ねたところ、スジャータは、この牛は死んではいるが頭も足も生前とまったく変っていない、だから今にも起きあがって草をたべ水を飲むかもしれない。しかし亡くなった祖父はもはや頭も手足も灰になってしまったのに、なぜあなたは遺骨を納めた土の塔のそばで泣き悲しんでいらつしやるのですかと問うたので、父はやつと自らの悲しみの無益なことを悟った」と言います。パールフトの浮彫りには、中央に死んだ牛がよこたわり、その鼻先に草をおしつけている青年がおり、後方に父親が見えています。肉親を失った悲しみは、古今、洋の東西を問わず同じといえましょう。悲しみに沈む人々になくさめの言葉もないこともしばしばあります。しかしいつまでも悲しみに沈み、嘆きにおぼれてはいけません。苦しみの中にも一条の光を見つけ、それをよすがに精進につとめることによって、やがては幸せな生活がよみがえると信じて毎日を大切に生きて行きたいと思えます。

八月号



正行といふは阿弥陀仏に
おきてしたしき行なり
——『三心義』

目次

法話

現代人の信仰生活

後光の喪失……………土屋光道……(2)

日中友好の旅をして

ニハ億人民皆是大阿羅漢ニ……………山野井貫琇……(7)

<民話シリーズ> 三つの袋……………谷川のぶ也……(24)

自然を考える⑤<政治と自然>

ニ山と川のある町ニ

一地方行政30年の歩み一……………津村昭徳…(14)

現代と自然……………名越隆正…(19)

法然上人の弟子たち④

宇都宮一族のこと〔四〕……………梶村昇……(28)

浄土句集……………一田牛畝選……(23)

お経のページ

華嚴経……………(33)

<表紙裏・巻頭言> スジャータの話……………佐藤良純

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(34)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

—現代人の信仰生活—

後光の喪失

つちやこうどう
土屋光道

(大正大学講師)

○

つい日頃は見なれて、気にもとめずにいますが、仏様や菩薩方の像の後には、必ずと言ってよい程、金色の光背や円光がついています。これは一体何を意味しているのでしょうか。

釈尊をはじめ、地上にあらわれた宗教的偉人に接した人々には、何かその人格全体から光が射しているように

感じられ、前からは勿論、その後からも、いわゆる「後光」がさしていると実感されたことが、沢山の記録にのこっています。『勅集御伝』にも、法然上人のうしに頭光が拝まれ、闇夜に燈燭なくして光明があつたことが記されています。

こうした光は、肉眼に見える光と違った、いわゆる霊光、心光であります。その強弱はあるにしても、宗教的偉人にばかり限ったものでもありません。

自分にとって生涯忘れられぬ恩人といったようなお方、その人を思い出し追慕するだけで、こちらの心が明るくなり励まされるような方は、みな、その後姿が懐しく、そのうしろに後光が感じられる人達ではないでしょうか。

後姿にその人の心、その人の一生が現われ彫まれると申します。生活苦の中に一家を支えて立働いていたお母さん、あの優しい顔以上に、台所のあの後姿が忘れられない。人生の重荷をずっしりとあの肩に担って耐えていた父の後姿が懐しい。長年苦勞をかけ続けたのに、不平一ついわずに看病してくれるわが妻、病床よりそっと手を合わせて夫が拝むのも、やつれた妻の後姿でしょう。

こうした、後姿が拝まれる人は後光のある人であり、心光、靈光の輝く人です。そうした後姿が明るい人達に比べて、多くの人間は前方は光っていても、後の方は光がない、いわゆる後暗い^{うしろぐら}ことが多いのです。

昔の私達の祖先は、人格のこの光を大切にし、特にこの後光に注意して、とかく背後の暗いことをいましめ、後暗いところのないよう、陰に光をあて、努めてそこを明るくしようとしました。例えば、常々、

「本当の商人は、面と向って拝まれているだけでは駄目、後から拝まれるようにならなくては一人前でない。そのためには、まず自分自身が人様の後姿を拝め」

「教育には、面と向って、口やかましく説教するより、無言の後姿で教えろ」

「前面の敵は怖^{こわ}くない。剣士は常に背後の敵に備え、後の隙に意を怠るな」

「舞台に立って、観客に背を向けた時が一番難しい。背中で演技出来れば芸も一流」

などと戒めました。

また一般の御婦人方のお化粧を見ても質素の中にも日本髪の艶やかさ、太鼓帯の雅やかさ、後衿^{うしろえり}の麗しさなど、後姿に誰もが気を配って、小さな合せ鏡を使ったものです。

現代人は、そうした背後への心くばりを失って、前を

飾り、正面を気にする割には、後を気にしない。人の後指をさす割には、自分を振返り、そこに光がないことを反省する機会が少ないのです。

○

金融業で財をなしたある方から聞いたのですが、

「世の中には、高利貸といって、すべての金貸しを鬼のようにいう人がいるが、全部がそうとは限りません。貸して喜ばれ感謝される人が、本当に成功する人です。しかし、貸した当座は、助かったと頭を下げて礼をいわれても、いざ期日が来て返す段になると、とかく恨みをのこす場合が多い。それだけに、貸す最初の時に、よくよく念を入れて、余程、当の相手を選ばなくてはなりません。それで、私は借入の申出があった時、どんな担保やよい条件があっても、初対面の時には決して、すぐには応諾しません。私独特の方法で、その人物の信用調査をするのです。それは、翌日、それこそ朝早く、当人の家を訪ねるのです。その時肝腎なことは、玄関から入らず、裏の勝手口を開け

て入るのです。若し、どんな粗末な貧乏屋でも、そのお勝手口が清潔で、履物もキチット揃って、流しも綺麗に片付いていたら合格。逆に、どんなに門構えが立派で玄関が奇麗でも、台所が散らかり汚れていている場合は絶対に貸さない。前者ならば、まず間違いなく貸しても大丈夫、重ねて何度も融資し、本当のお顧客さんとして両方とも喜んで長くお付合が続くのです」

というお話して、大変面白く承りました。

人事興信所のベテランも、お嫁さんの調査を依頼された場合、職場や学校より近所の評判、特に台所に入出入る八百屋や酒屋や洗濯屋の御用聞の噂を大切にすることが多いです。

どうも一般に、家柄や、学歴、社会的地位、財産、名誉は、とかく表面に飾り誇りにもしますが、恥しい出生の秘密は勿論、失敗や罪科は人にも隠し、自分でもなるべくそれに触れないように心の奥に押込めている事が多い。

門構えや、肩書や、服装は立派でも、裏口の方はいたって乱雑。表面は、正直、誠実をうたい文句の看板にし

ながら、陰口、背信、裏切り勝手の背徳の紳士淑女が今日少くない。

そういえば、最近のアパートやマンションは、表口だけで裏口がないし、昔は一家の裏や奥向のことを一切取仕切って、男には口を出させない程の權威と責任を負っていた、裏方・奥方・奥様が減って、今では何でも人前に出たがる女性が増えました。奥様と呼ばず表様という方がよいのかもしれませんが。

表を飾って裏の手を抜き、前を光らして後の暗いのは、家庭に限らず世の中すべてがそうです。政治、経済、教育という世界も、裏取引、裏金、裏口という背徳が今日程ひどい時代はないといつては言い過ぎでしょうか。しかも、それを指摘され告発されても、一切を鉄面皮に否認し、闇に葬ろうとする。先祖の背後の清らかで明るい、後姿を拝み拝まれる後光を尚ぶ心はどこへ行つたのでしょうか。

○

今日の文明は、大自然の太陽や月の光明を尊ばずに、人工の眩しいライトをあびることを喜び、神の靈光や仏

の慈光を拝まずに、七色に妖しく誘う煩惱の不夜城のネオンに遊ぶ。そこに己が背の罪の陰りに涙し、後の死の闇黒の影法師に震える心を喪失したのでしょうか。それとも、それを覗くことすら不安なので、敢えて眼を逸しているのでしょうか。

しかし、それも、必ずしも今の時代とも限らない、人間の通弊なのかもしれません。

昔、ある男が道元禪師に、

「かねがね、私は神仏を尊び、そのために色々と尽くしましたが、一向によい御利益に浴したことがない。果して本当に神仏の御加護とか御利益などというものがあるのでしょうか」

と疑わしげに質ねた。

道元禪師は、

「お前に限らず、多くの人間には、表を飾り、裏を隠す心がある。己れがやった善事は、これを手柄として自らにも誇り人にたびたび吹聴する。それに反し、悪事は

なるべく秘して人に隠し自分にもなるべく忘れようとする習性がある。そういう心が実は天の神仏の御心に叶わないのだ。神仏は逆に、どんなに善い事をして、一切他人に秘し、つとめて隠れて徳を積み施し、悪い事は自らにその罪を悔い、さらに人に隠さずに告白し謝り、再び犯すことのないよう祈り誓う人、そういう人が好きなのだ。従って、この神仏のお思召に叶うようにお前がするならば、必ずや、その冥加、利益が授かることは間違いない」

と、お誠えられたと『正法眼藏随聞記』にあります。

元祖法然上人も、善導大師のみ教え通り、念仏信仰は勿論、すべての行為の心のあり様として、三つの安心を説かれます。その第一の「至誠心」とは、真実心であり、真実とは、内外相応、すなわち、外と内、表と裏、

前と後とが違わないことです。あるいは一歩進めて、たとえ、外や表や前がいかようにあれ、その内・裏、後が真実であることが絶対に必要であると厳しく教えておられます。これまた、すべてにあい通じる教えであります。

○

現代の宗教は、とかく形式に流れ、あまりにも表面的な奇麗事に終始しています。もっと、人間の蔭の部分に光をあてなければなりません。

み仏達の光背を拝み、すべての人がお蔭に感謝し、罪を懺悔し、互に陰徳を積み、陽光を頂いて世の一隅を照す。そうした後光ある人間を理想とする社会に目覚めること、そこに、現代社会における宗教の役割があると信じます。



日中友好の旅をして

“八億人民皆是大阿羅漢”

やまのい　かん　しゅう
山野井　貫　琇

(元長野市更北仏教会会長
長野市常然寺住職)

○ 前　書　き

去る四月十日から五月一日まで、中国仏教協会訪日友好団として、中国仏教協会副会長趙樸初先生を団長として十二人の団員が来日した。そして東京・京都・奈良など数カ所を巡り、あらゆる所で友好親善の目的を果して帰国された。宗門では東京で増上寺、伝通院、京都で総本山知恩院などに立ち寄られたのであるが、とくに浄土宗門にとっては昭和五十五年に浄土教高祖善導大師入滅千三百周年記念行事が行なわれようとしている時、日中友好浄土宗協会の結成にまで至ったことは、真に喜ばし

く意義深く使命の重大さを感じるのである。

このような時、私は四月二十四日から五月九日まで、長野市長柳原正之氏を団長として三十五名“日中友好長野県各界訪中使節団”として中国を訪れて来た。北京から瀋陽、長春、ハルビンと東北(もと満州)の中心部まで次第に北上したのである。団員は長野県内一円にわたり県会議員、各市の市会議員、会社社長、学者、技術者など各界一騎当千の強者が集まった。友好という目的のため、いわゆる満鉄路線上のみを走らなければならず、一時も自由なる個人行動は許されなかった。このようなお膳立ての旅の中から、私は自分なりに私のみた中国の状

況を率直に述べて、仏教精神による日中友好の重大時機であることを諸賢にあえて披露するものである。

○ 為人民服務

羽田空港で搭乗した飛行機は中国民航ボーイング七〇七機であった。タラップから機内に入ると人民服を着た



—羽田空港歓迎会—



—人民日報社—

おかつぱで人相のいいスチュワーデスが三人、拍手をもって迎えてくれた。私も思わず拍手をもって応えた。いままで幾回か飛行機に乗ったことはあるが、人民服でおかつぱ、それにブツ靴のスチュワーデスなんて初めてである。身長はさほど大きくないが、その働きぶりは実に見事なものであった。日本女性そっくりの彼女たちだ

が日本語は通じない。だがその機敏な奉仕的動作には、今までのスチュワーデスに見られない好感を持ったのである。

やがて初めての中国に降り立った私の目に映じたものは「為人民服務」の額である。飛行場で見た。最初の宿泊所である北京友誼賓館の入口にも高く掲げられ、その他あちこちらでよく見かけられたのである。人民の為に服務する。多くの人々の為に奉仕する。何と美しい言葉ではなからうか。機内のスチュワーデスの服装と働きぶりを思い出してみた。

やがて指示された部屋に入って同室の団員と共にタバコを一服していると託送用のトランクが二つ届けられた。白い上衣を着けたボーイが

きびきびと、これまた人相よく持ち込んでくれた。謝謝しやうしやという和一層顔をほころばせて嬉しそうだった。そのうえ、折角机上に用意した茶も飲まずに腰かけている二人の姿を見た彼は、更に取手のついた大きな茶碗に茶の接待までしてくれた。いささか恐縮をしてチップをはずもうと思い、ポケットに手を入れたが、すべきでない聞いていたので止めにしたけれど手と心のやり場がない。せめてもとタバコ一箱を差し出したが、手を横に振ってどうしても受け取らない。

昨年インド仏跡回りに参加した際カルカッタのホテルで入室した途端、ノックをして入って来たボーイが既に運び込んでおいたトランクを指して「この荷物はわたしが運んだのだ」という身振りをして手を出した。さっそくチップをやると引きあげたが、間もなく他のボーイが再びやって来て同じ荷物のチップをねだった。追いついたが再三他のボーイがやって来たのには閉口した。トイレに入ってはチップ、撮影にいい場所を教えたからチップと、常にチップチップ攻めに合ったのに対し、この中国における「為人民服務」思想教育のゆき届いていること、廊下服務台に勤務する。彼ら彼女たちにはほとんど

感心したことである。

○ 熱烈歓迎

瀋陽の第一工作機械工場を見学した時のことである。団一行が到着した事務室の玄関口には「熱烈歓迎日本第二次日中友好長野県各界訪華団」と大きな黒板に真赤な文字で記され、きれいな花模様まで描かれた歓迎看板が立てかけられていた。わが国の為にこのような大きな看板、しかも日本では未だ曾て見たこともない立派な文字で本当に嬉しかった。応対に当たった革命委员会主任の史経錦氏は言う。「当工場の労働者三、六〇〇人を代表して皆さんのご来訪を心から歓迎します。日中両国は二千年来悠久の歴史の上に成り立った友誼の間がらです。どうか自分の家にいるのと同じ気持ちでゆっくりつろいで、何でも申しつけください」と言う。初対面のわれらに対し何たる親しみの言葉であろうか。彼の語る工場は一九四九年の解放後は生産が順次増大し、一時四人組によって阻害されたが、華主席、中共の指導によって再び未熟ながらその実を挙げている。四十種類にのぼる機械生産のため、技術、研修、管理、福利厚生、衛生、運



—鉄西区工人村人民公社—



—第一工作機械工場—

輸その他万搬にわたって全員一体となって労働に励んでいるという。その後各職場を巡回したのであるが、どの入口にもわが団熱烈歓迎の看板が立っている。中に入ると職種可能な限り拍手笑顔で歓迎してくれる。騒音の中に拍手の音だけが耳に入ってくるように思われる。このような中だったら、私も共に働いてみたくなる感じさえ

した。

帰りがけに彼は更に言う。「今日は本当にすばらしい機会でした。友好が一層深められたものと確信します。友誼の前途は有望で幅広いもの、日本へ帰られたら、当工場の労働者の気持ちをよろしくお伝えください。皆さん方くれぐれも健康に注意して友誼のために大いに頑張らしましょう」と。何たる心のこもった嬉しい言葉ではなかったろうか。このような雰囲気をつくり出した史経錦氏の頭のよさに敬意を表するものである。

その後、鉄西区工人村人民公社を見学した時であった。ちょうど土曜日の午後のせいもあったのであろう。思いがけない多くの子供たち、親たちが公社事務所の入口で拍手大歓迎をしてくれた。当団の方で本当に申し訳けないくらいであった。瀋陽労働者の団結力にはまた格別なものを感じるのである。

またハルビンで幼稚園参観の時、車は正門についた。鉄格子門の中では色とりどりの服を着た園児たちが甲高い声を発しながら、調子に合

せた拍手で迎えてくれる。通訳に聞いたところ「熱烈歓迎」といつているのだと言う。言葉こそ分らないが目を輝かせて懸命に迎えてくれる姿には、子供ながらに迫力が十分汲みとれる。戦争を知らない児童たち、こんなにまで無心に歓迎してくれる幼な子に目頭の熱くなるのさえ感じた。中では勉強や催物をたくさん見せてもらい、お礼に当団の方からは「幸せなら手をたたこう」を歌って退園したのであった。今でも耳底に残るは工人村大衆の熱烈歓迎の拍手の音と、幼稚園児のあの天真爛漫な甲高い歓迎の声である。

○ 愚公山を移す

私は中学生の頃漢文でこれを勉強したことがある。昔中国に愚公という老人がいた。自分の家の前にある山が邪魔になるので、ざるに土を入れて、一年がかりで渤海へ捨てに行ったので人が嘲笑した。親子はなおもこれをつづけたので、天の神が感動して一挙にこれを助けたという。寓話にせよ、この広大な地域に住む中国人なればこそ、そんな事もあったことだろうと想像してみる。昨年インドでは、町々の軒下に腰をおろし通行人を徒らに

眺めている多くの人々の姿を見た。また建設作業には裸足の女性が頭上の籠に煉瓦を四つか五つ入れて、いかにものんびりと運んでいく風景を見て来た。「愚公山を移す」話からすると、このようにのんびりした風景が中国にあっても然るべきだと思うのに、現代の中国の様相は全く違う。

どこの町、どこの村でも全員が動いている。屋外では静止の影はない。早朝から見られる人影も、必ず何かの目的に勉めている。終日注意してみるが暇そうな者は一人も見えない。やがて時間ともなれば自転車の波が続くのである。彼らの毎日の足には自転車が第一、そしてトロリー・トレイバスなどが重要な役を果している。中国の憲法第九条には「働かざる者は食うべからず、能力に応じて働き労働に応じて分配する」と示されている。今や社会主義の建設に向かって、意気高く、高い目標を目指し、多く、早く、立派に、無駄なく進もうというのが現代である。社会主義建設総路線の旗印は高く掲げられ、人々は喜々として働いている。老いも若きも、男も女も人民服そしてズック靴姿でのびのびと活動に余念がない。偉大なる毛・華主席の教えに基づいて愚公のざる

はフルスピードで回転しているのである。家の前の邪魔になる山は神の力を借りずとも自力更生、刻苦奮闘でまたたく間に渤海に運びこまれる。どこの人民公社・工場・学校でも真剣になって活動している。女性は天の半分を支えるものという毛主席の言葉どおり、女性も男性と共に塵油にまみれて懸命に働く。給料は低く、生活程度も私たちからみて余り良いとは言えないが、昇給は希わないし、物価の安低が第一だという。愚公は決して愚かでない。刻苦勉励の神である。なればこそ毛主席もその著の中に愚公を賛えている。このような愚公の集まりが現代の中国である。華国鋒主席が今や全世界を相手に目覚しい活躍をなしているが、八億愚公が後ろに控えているからなればこそであろう。

○ 赤い旗じるし

中国の首都北京の中心をなす天安門には、上に国章の真赤な五星標が掲げられている。その下に毛沢東主席の大肖像が飾られ、その左右には赤地に「世界人民大団結万歳・中華人民共和国万歳」と大書されているのが誰にもはつきり見える。楼上には巨大な八つの赤い大宮灯が

吊され、祝日ともなれば四周に大赤旗が立ち並ぶのである。なお天安門の左右に位置し、この広場を圧倒するかのように建てられている人民大会堂や中国革命博物館、歴史博物館などの大建築物の正面には、上に八本の大赤旗や毛主席の大肖像が飾られ、両側の柱には毛主席の革命路線勝利万歳などの赤看板がよく目立つのである。

いったい中国はどこへ行っても建物の屋上に軒先に玄関の入口に見えるのは「偉大なる中国共産党万歳、無産階級文化大革命勝利万歳、華主席を中心とする党のまわりに団結しよう、毛主席の旗印の下に団結し華主席の勝利のために前進しよう」という赤看板を掲げられた多くの大赤旗である。そして玄関上には毛・華主席の大肖像が仲よく並べ飾られている。中国八億総人民のあるところ赤い旗印のもと毛・華両主席信仰に大わらわである。

四千余年の歴史を有する中国には、もちろん古いものと新しいものが渾然一体となって存在しているわけであるが、常に活動して止まない現代中国人の心の中にあるものは、この両主席への思慕と赤い旗印のみである。

旅行中、私は幾人かの中国人民労働者と話をしてみた。彼らは毛・華両主席を神と仰ぎ、社会主義総路線の

人民共和國建設に愛國心の熱烈なるものを感じる。マルクス、レーニンの唯物思想に生きる彼らは、現実にのみ



—北京天安門—

生きて来世を考えない。忠良なる中国人民として、日常を喜々と働き、國家建設の爲にのみ生きていく、何と殊勝な志ではないか。現世のみに生き甲斐を感じ、死してそれまでというのである。山の彼方に幸いを求め、青い鳥を探して旅をす

る。未来に極樂を信じて現世に善業を積む。このような事は、今の彼らには一切考える余地がない。

中国には歴史的に偉大な寺院は沢山あるが文化遺跡として保存こそすれ、自己修養のための信仰の対象とはならない。僧侶はおれど文化遺跡のお守りであって人心指導の役者には程遠い。宗教信仰は過去の遺産となつて、現実には独立自主・自力更生・刻苦奮闘・勤儉建國の熱烈なる信仰と行動あるのみである。西歴一世紀にすでに中国に伝來した仏教は、史実こそあれ人民精神の支えにはならない。

彼國の道々には「一慢二看三通過」という道路交通標識がよく見受けられる。第一にゆっくり心を落ち着け、第二に左右をよく見て、第三に通過せよというのである。今や中国は通過の時代であろうか。華主席を先頭に総人民前進の時期である。仏教的にみるならば、彼ら八億人民に皆是れ大阿羅漢である。現代に生きる仏教僧侶として、まずは己れの使命に思いを致し、このような日中友好の重大さを痛感しなければならぬことを、あえて諸賢に訴えて止まないものである。

自然を考える

(五)

政治と自然

山と川のある町

— 地方行政三十年の歩み —



津つ村むら昭しょう徳とく

(横手市議会議員
横手市九品寺住職)

雪の国秋田県、特に横手市周辺は秋十月より春五月の中旬まで暖房のお世話にならないければならない処ですが、この地方にも本年は早い夏が訪れて来ました。七月八日、県内は梅雨が明けました。气象台の話によると、平

年より十七日も早く、昭和十六年の記録以来最も早い時期の梅雨明けといわれ、これは太平洋の高気圧が大きく張り出す夏型の気圧配置になったためです。連日カンカンと照りつける三十度以上で、今日十日は、横手市で三

三・九度に上昇し、平年より七―八度も高い今年の最高の気温でした。正に、真夏の到来のうだるような暑さに面喰らい、汁だくで仕事のにぶる一日で、夜に入っても一向に下る気配がありません。

こうした中で先日法然上人讃仰会から、「政治と自然」というテーマで何か書くように仰せつけられ、全国の宗侶が多くの自治体で活躍しておられるのに、私如き北辺の田舎の和尚に、特に指名を頂き恐縮しておりま

す。ご存知の方々もある如く、私は物をよく書くことも出来ず、また文才もない。一文不知の愚鈍の身"であれば、果して問いに対する答えになるかどうか分りませんが、思いのままに今日まで歩んで来た一端を書きつらねて、お許しを頂きます。

まず、私の生を得て今日まで住んでおる横手市の概要を紹介致します。横手市は太平洋側と日本海側を最短距離に結ぶ横手盆地にあり、理想的な好条件に位置し、古くより秋田県南地方の政治、経済、文化、交通の要地として発展して来ました。そして現在は県南の中核都市として、大きく躍進途上にあります。当市の沿革は、奥羽の豪族清原一族の対立により起った『後三年の役』の古戦場金沢柵があり、徳川時代には秋田藩主佐竹侯の城代家老が統治、居城の朝倉城は『戊辰の役』で落城し、この城跡は横手公園となり、県内一の規模を誇っています。この公園は緑の山と湖水をたたえて、四季を通じて、春は桜、

つつじ、また広大なバラ園があり、それは秋まで咲き香り、毎年十月十五日より十一月十五日まで一カ月間菊人形まつりが行われます。大型の菊人形がスポンサーづきで公開され、また各種の菊が、大小の鉢物で約三千と、切花が五百程陳列されて、品種毎のコンクールが行われます。冬はスキー場として、また雪まつりの広場として行事が行われ、バラエティに活用されております。雪国の民俗行事たる、「かまくら」「ぼんでん」は、二月十五日から三日間の雪まつりとして全市で盛大に行われ、十万人近い観光客が訪れます。また北には金沢柵を中心とした金沢公園があり、規模の大きい処で、頂上には八幡太郎義家を祀る八幡神社があり、山上よりの眺望はまた格別であります。

横手市は、明治二十二年に町制、昭和八年に朝倉村編入、二十六年に旭、栄の二村を合併して、市制を施行、三十年境町、黒川村の両町村、翌三十一年に金沢町の、さらに山内

村大沢地区を一部合併し現在に至っております。横手盆地の中心地にあり、面積は一一〇・六六 km^2 であり、人口は約四万五千人で、最近都会よりUターンの傾向で、月毎に増加しております。農村都市であり、また消費都市でもあります。約八十年前に大水害と大火災があり、甚大な被害を受けたことがあります。また昭和三十八年に相当の水害があり、その後横手川が一級河川に認定され、数度に及んで関係省庁に陳情して、一昨年より本格的な改修工事に着手し、本年度は陳情の効果が現われ、国からの補助事業を大幅に上昇して工事が順調に進行中です。当初三十年計画といわれましたが、市民の協力のもと、議会と市当局が一体となり、政府の援助を得ておりますので、今後十年後には完成の目途がつきました。

また去る昭和四十九年には大豪雪に見舞われ、その前年の暮以来のオイルショックと共にダブル・パンチで、市民生活の動揺甚だし

く窮乏に追いつめられました。一月二十六日朝から降り出した雪は夜に至っても止まず、一日で三メートル余りの積雪となり、交通は途絶し、雪却しや除雪に対する人手も丁度出稼ぎの時季で足りなく、高い賃金を払っても人手を求めることが困難、消防や青年会等も出動して屋根に上り、ついにご婦人連も懸命に頑張りましたが、道路上の除雪は一向に進みませんでした。そして、燃料も食糧も運搬出来ず、結局秋田陸上自衛隊に出動をお願いして、ようやく活路を得ました。市や社会福祉協議会では直ちに生保世帯、老人世帯、一人暮らしやその他の援護を要する世帯に対して必要の措置を取りました。その時に私の寺も本堂の屋根を大破して相当の被害を受けましたが、これは応急措置を取らせて、私は市の災害対策本部入りでした。数日して、市長と共に政府に陳情する一人として上京しました。あの時の除雪費は一戸当り平均七万円といわれ、家屋や店舗、倉庫等の倒壊等、市民

は大きな打撃と甚大な被害を受けました。

こうしたことは全く珍らしいことで、通年さしたる災害等もなく、おだやかな住みよい処です。昭和の初めに作家石坂洋次郎先生が当地の旧制の横手中学と女学校に十二年間教鞭を取り、住んだ地であり、『何処へ』、『山と川のある町』は当地をそのまま書いたものであり、昨今は「山と川のある町」として知られております。この町は長い間城下町として、市の中央を流れる川を境に、お城に近い方は内町として武家屋敷を中心とした士族の町、外側は平民と商家の住む外町としてはつきりと区別され、武家によって支配され、ご維新後は外町の地主によって支配され、地主は広大な田地、山林を所有し、また地主商法をやったり、さらには大小の借家を持ったりして、小作人や庶民はこの下で長い間苦勞を重ねて来ました。そして旧二大政党の対立による政争がはげしく、町の発展を大きく阻止して来ました。昭和の初め頃より農民運動や

小作争議が芽生え出し、そして終戦後は農地改革により多くの地主が破産し、その中で事業や商法を地味につづけた人々はこれから脱しました。そしていよいよ農民が大きく躍進し、農家様々の時代が出現致しました。

昭和二十六年市政施行第一回目の市会議員選挙に、私は無所属として立候補し四十歳の無名の新人として上位当選させて頂きました。私は僧職にありながら、何故政界入りしたかといえば、終戦後の混乱期に当り、高座説法ではどうしても社会浄化に程遠いものを感じ、自ら渦中に入ること決意したわけでした。これこそ浄土門の真随であり、「人間の宗教」であると思ひました。教育と社会福祉に対する実践と住みよい環境づくりを掲げて、市政を通じてこれが実現に努力し、今日に至りました。

戦後の新しい教育制度のもと老朽校舎の整備新築、統合問題等の解決、児童福祉施設、母子家庭、老人福祉などのほか、各種の福祉

問題と取り組みながら、二十数年に至りました。特に「し尿処理及び下水道事業調査」特別委員長として、し尿処理場とごみ焼却場の建設の時は、敷地の問題で賛否両論と、地域住民の反対に会い、二年がかりで適地を選び、住民と地権者の理解ある協力を得ましたが何とか解決させました。しかし次に来たものは、施行業者選定で論議が交されて、ようやく一年後に解決して、「し尿処理場」と「ごみ焼却場」が完成したのでした。そして施設改善拡張等が行なわれ、一昨年約八億円で整備され、自然も破壊されることなく立派に道路も拡幅されました。しかし当時は地価が安かったので、近所に住宅が出来はじめ、その人々より悪臭と公害だと、施設の移転方が申し出られました。人間という者は誠に勝手なもので、立派な道路も出来たし、しかも地価も安いので、住宅を建てたのでしょうが、それがこうしたことを好きかってに陳情してくるのです。

現在市では、昭和四十五年より市の中心部より大規模な都市改造を実施中です。これに伴い下水道の工事も順調に進み、駅前を中心とした都市計画が実施中で、大正十三年に改築した横手駅も老朽したので政府や国鉄に二年余に亘る陳情が許されて、今年三月より現在の二倍の駅舎と五倍近い駅前広場を併せて工事中です。十一月一日に近代的な駅舎がオープンされることになります。駅前は二十二メートル幅の駅東線が新設され、駅前にはすでに近代的な商店街が出来上り、この延長が私の寺の境内に入り込み、保育園を含む約千坪が本堂の西北に替地が出されることになり、園や庫裡が移転されます。私の寺は町の中央部にありましたが、再度隣寺の出火により焼失したために、明治二十九年加賀谷円右衛門という大施主の一寄進により町はづれの田畑の中に、六年の歳月をかけて三十五年に現在地に再建されました。時代の流れは大きく変り、現在は市の中心街なり、四方を道路

に囲まれた横手山九品寺として向う二年で面目を一新するわけです。

当市には、「りんご園」のある工場団地として、二〇二、〇〇〇㎡の敷地を有する厚木自動車部品秋田工場が、去る昭和四十九年十一月より三百七十名の従業員で操業しており、自然に親しみながら働いております。今年の市政の重点施策として、躍進の町づくりをめざす駅前地区ほか、土地区画整理事業やまた足もと優先の道路づくりのための道路整備と、豪雪対策としての流雪溝の設置、広域体

現代と自然

外は暑い日射しの中。鬱蒼と茂る裏山の木

育館の建設、体育施設の整備と教育、文化、

コミュニティ活動の推進、さらにきびしい情勢を切り開く農業施策の推進と市民福祉の向上、市営住宅建設等の「暮らしと健康を守る施策」等であります。これらを当局と議会が一体となって実現に努力する所存であります。

現在、市議会の会派構成は、定員三十名で会派十会派という中で、与野党が接近しており、私一人が「元祖無所属」です。「元祖とは何か」と問われれば、法然上人の一席を説いて——、かく申しておひらきということです。



名^な
越^{ごし}
隆^{たか}
正^{まさ}

(島根県議会議員)

陰でひんやりした次の風を待つ一瞬、朝から

ずーっとときこえていたであろう蟬の声に気がつく。

蟬と風と暑い太陽の日射しは、大古の昔から変わることなく続いている。悠久の自然に比べれば人類の歴史は、たかだか数千年である。古えから続く大自然の営みからすれば、人間の歴史は何と短いものであるうか。

○

この中にあって人間は何とおごり高ぶっているであろうか。今、人間の社会は急テンポで進んで自然の摂理にまで迫ってきた。ついに生殖作用まで試験管でできる世の中になったという。しかし、自然科学の進歩に比べて社会科学の歩みはのろい。「人間の人間らしさを求める」社会科学は、それに単純に追いついてゆけない。

ひと頃、(ソ連が初めてスプートニク衛星を上げた頃)工業万能主義の時代があった。その結果はどうであったろうか。公害が発生し人

の住む環境を破壊してきたではないか。自然界の浄化作用を人間はどうして認識しようとしなかったのだろう。天然の汚濁した川の水は、流れ下るうちに、また時間がたつとともにしだいにきれいになっていく。もともと川自身のもつ自浄作用を妨げてはならない。折しも瀬戸内海で大量のハマチが全滅し、絶滅にひしているという報道がある。

隠岐の海の紺碧なすき透る青さをながめた時、こんなにまですきとおって、こんなにまで青い物言わぬ自然が、何かを答えているような気がする。今に大自然の報いを受けることがあるのではなからうか。

○

戦後の打ちのめされた精神的空白の時期に、戦勝国であるアメリカに象徴される大量生産、大量消費(マスプロ)の風潮が日本人の価値感を捕えてしまった。「勝てば官軍」様で、そっくりやり方が違ってきた。

元来日本人はアメリカと違って個人個人で考えるという伝統がなく（奇妙なことに、そのエネルギーは他人との競争意識であるが）、組織的な集団で行動し、悪く言えば不和雷同の民族である。それが新大陸と称され、自由な発想、若者の発想を重んずる資源豊かな国の、そういう条件の違う国のある一部分だけをイージーにまねしてしまったのである。

戦前の日本は物質の足りないところは、物質でなく精神で、「武士は食わねど」式に補ってきたのではないかと思う。

○
ところがである。

今又現代の子供はテレビによって娯楽本能を過剰なまでに刺激されている。人間形成の大事な時期において絶叫的なテレビにしがみついている。親はそれを止めるすべを知らない。現代の子供の社会では、そういう番組を見ていることが子供の世界の常識だとか。

本能に訴ったえるような安楽な番組を見ている大多数の子はどのような人間に育つであろう。将来の大衆となる人間がそういう同一条件、同一反応、短絡思考の持主となったとき、日本はあたかもドイツがナチズムに酔ったように何かに突走するような気がしてならない。心ある人は何かを求めている。若い人の中にも物質では満たされない日々の虚しさを埋めようとしている人達がいる。

○
政治家はそれに応えなければならない。

アメリカが健全であるのは、個々の人が大いに自分の意見をはき行動するからである。日本ではどうしてそういう風潮が育たないであろうか。「声なき民」という言葉がある。「声なき声」が政治をよくするであろうか。否、それは為政者によって都合よく解釈されるだけである。今までの行政は、心ある大衆の声を汲み出すことを押え、反対にあきらめ

と失望と無関心層を育ててきた。

今の世代(明治、大正、昭和を含めて)、老人クラブ、戦前、戦中派、戦争を知らない世代、テレビッ子の世代を超えた共通の何かがあるはずである。

人は今一度振返って原点にもどるべきであろう。野性への回帰、自然のふところへとびこんでみる必要がある。「自然に還れ」は、現代にこそ要求される。

~~~~~  
かつて「日本列島改造論」などが打ち出されて、日本全土が国土開発のブルドーザーにおおわれ、それはあたかも今現在までも続いている。しかし「乱開発」などと非難した声は、緑の自然保護へと改めて目を向けさせ、それはそれなりに効果もあったろう。しかし人口の問題をはじめ、文化それ自体の展開の様相からも国土の時代に合わせた開発は止むを得まい。さて、人間の自然な生活を育くむような未来社会へ向けての行政とは？ (H)

# ◇「浄土句集」欄投稿要項

八月に入りまして、酷暑の毎日が相変わらず続きませんが、本誌俳友の皆様はお健やかに過ごしのことと思います。

さて、ホトトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)を選者にお迎えして、正月号より開設された「浄土句集」のコーナーもなかなか好評のうちに続けられています。

どうか皆様も、お仲間などにお呼びかけいただき、振るってお投句下さいませ。

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい  
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会宛

# 浄土句集

## 一田牛畝選

千葉 菅 ます

菩提樹は先祖の植えし寺の庭

東京 猪瀬 幸子

杉落葉踏んで詣でし祖廟かな

福岡 増谷 雄鳳

彼岸花土塀に沿うて燃えてをり

東京 田中 秀代

傘たつみ枝折戸押して牡丹見に

東京 鳥居 千代

石楠花や千年杉の山深く

東京 末常てる子

新緑の故郷へ仏事老姉妹

東京 星野 小登

亡き人の思ひ出多き木の芽和

棚経の用意三里に灸すえて 一田 牛畝

東京 真野よし子

観音の御ン手にすがる袋蜘蛛

素裕のびんと張りたる博多帯

福岡 荒牧 還愚

我が坊は別荘に似し若葉風

評 素裕にしめている帯は博多織である。  
博多帯は地が堅いので締める時は、きゅ  
うきゅうと鳴って他の帯に味えない気持  
ちよいものがある、そして其の柄も献上  
であれば尚更ら粋なもので羽織の下でな  
く素裕がよく利いていて、びんと張って  
いるのが博多帯の特長である。原句は  
「裕着て」であったが、素裕と添削した。

東京 阪入 等達

明易や五重御作礼有難く

山形 松田 允子

下校の子軒借り待てる走り梅雨

東京 阪入志津枝

青嵐路傍の花の名を知らず

東京 新井 新生

嫁と娘は一と味違ひ風薫る

東京 原口 敬子

ホトトギス瑠璃光堂の上にな

福岡 高良 慈風

福岡 原 敬二郎

ヨウヨウを片手にはしゃぐ祭の子

## 〈民話シリーズ〉



# 三つの袋

谷川<sup>たにかわ</sup>のぶ也<sup>や</sup>

(郷土史家)

ある山深い閑村に小寺がありました。住人は、人生をすべて知りつくした老僧と子僧さんの二人だけでした。

この子僧さん、生れは街の素封家の末っ子でした。二人の兄や姉とは、だいぶ歳が離れておりましたので、それはかわいがられておりました。

しかし、このあまやかしがあだとなり、いつしかなまけ心がおこり、また人のいうことを聞かない、粗放な子供に成長していったのです。

子供たちは敏感です。この子僧さんの変貌ぶりに、遊び友達は、一人去り二人去りして、とうとう一人ぼっちになってしまいました。

さらには、それまで何かと面倒をしてくれた兄姉も、

日増しに乱暴になっていく弟を見て、憎らしさがつのるばかりで、とうとう相手になってくれなくなってしまったのです。

子供の行く末を案じた両親は、いろいろと手立てを劳しました。しかし、一度ひねくれた子供心には、そんな親の慈愛は通ぜず、かえって反抗されるのが落ちというところまでできてしまっていたのです。

両親の悲しみは募るばかりでした。どうしてこんな子供になってしまったのか。これまで人様に迷惑をかけたこともないのに、何の因果で、こうまで苦しまねばならないのか、考えれば考えるほど分らなくなり、悲嘆の日が続きました。

殊に、人一倍気の弱い母は、そんな子供の行動を見るにつけ、気の休まることもなく、ついに病いの床についてしまいました。食事ものどを通らず、日に日にやせ衰え、見るもあわれな姿となっていてしまったのです。

それでも子僧さんの根性は変わりませんでした。

母は、こんな見にくい姿をさらすより、子供と一緒に死して、かの国で生れかわり、もう一度やり直そうと考えたのです。枕辺に子供を呼び、最後の力をふりしぼって起きあがり、小さく、そして静かななかにも説得力のある口調で語りかけました。

「そこに正座をなさい。そして眼を閉じて、これから母さんがいうことを、よく聞きなさい」

いわれた子僧さんは、いつになく神妙な態度で、この言葉に従いました。

「お前は、やりたいことをやってきました。しかし、それでは世の中は渡れません。現に、お前の相手をしてくれる人は、だれ一人いませんね。これから、母さんが相手をいたします。二人で遠い国へ旅出しましょう」

いうが早い、母は子僧さんの手をつかみ、秘かに枕の下にしのばせておいた短刀を取り出し、わが子を刺そ

うとしました。

ことの重大さに気づいた子僧さん。

「いやだ、死ぬのはいやだ、何でもするから、許してくれよ、たのむよ母さん」

といいながら、つかまれた手を振りほどきました。

その時です。

「そうか、何でもするか。よろしい。お母さん、拙僧がそのガキを預かろう。死んでは何にもならん。ひとつそのガキの性根をすえかえようではないか」

いつの間にか縁先に立っていた、見るからに汚ならしい老僧が、大声で叫びました。

「冗談いうな、乞食坊主なんかには用はないや」

死への恐怖から、一瞬救われた子僧さんは、そのもの静かな老僧に、罵声を浴びせました。

「母さんと一緒に死ぬか、そのお坊さんと一緒に暮らするか、お前の往く道は、この二つしかありません」

息も絶えだえしく、母は子僧さんにせまりました。

それまで、ただばく然と生きてきた子僧さんは、そういわれて、はっとしたのです。生きたい。生きてゆかねばならない。「生きる」ことへの執着心が、何かとって

もなく大きなものとなっていたのです。

「行くよ、そして暮らすよ、このお坊さんと」

真剣に語るわが子。母は、そこに初めて純真な子供の姿を見た思いがいたしました。

「そう、よく決心したわね。これからは、このお坊さんを親と思って、いいつけをよく守り、一日でも早くまじめな姿になって帰っていらっしゃい」

改しゅんの情ふかいわが子を眼のあたりにして、母はやすらかな面持ちになりました。そして、後事をその老僧に托し、静かな眠りに入りました。

こうして、老僧と子僧さんの、奇妙な生活が始まったのです。初めのうちは、事あることに反抗していた子僧さんでしたが、全然相手にしない老僧を見るにつけ、関心をひこうと努力を始めました。

いわれたことはすぐに実行し、いわれなくても、やるべきことは、進んでやるよう心がけ、さかんに気嫌をとったのです。しかし、気嫌をとり過ぎると、一層相手になつてくれませんでした。

こうしたことの繰り返しが続くうちに、子僧さんは、この世で生きていくための条理を、身をもって体験する

ことになり、やがてものごとの道理を、自ら表現できるまでに成長していきました。

子僧さんが、山ぶかい小寺に住して三年あまり過ぎたある日、老僧は静かに語りかけました。

「よく辛抱したわい、拙僧の教えることは、もう何もない、早く家に帰り、生れかわった姿を見せてやれ」

そして、はなむけだ、といって、ボロボロになった衣の三つの袋を子僧さんに与えました。

「お師匠さん、この袋の中味は何ですか」

みるからに軽い袋を受け取った子僧さんは、けげんそうに尋ねました。

「この袋は、拙僧がおぬしと同じ歳頃、お師匠さんからいただいた大切なものだ。中には何にも入っておらんが、これからいい伝える言葉を、しっかり中に収めるのじゃ、よいな」

「では、最初の袋を開けなさい。この袋は『胃袋』だ。健康で明るい生活を送るための、もとになる袋だ」

「つぎの袋を開けなさい。この袋は『堪忍袋』だ。多くの人々とたのしい生活を送るための、もとになる袋だ」  
「最後の袋を開けなさい。この袋は『御袋』だ。おぬし

をこの世に送り出してくれた母さんに感謝し、生ある時はできるだけ孝行をし、亡きあとは報恩の心をできるだけ、この袋につめなさい」

老僧は、言葉を選びながら論しました。

「ありがとうございます。確かにいまのお言葉を、それぞれの袋に収めさせていただきました。この袋を今後の生活の支えとして、一生懸命がんばります。いろいろと、本当にありがとうございました」

子僧さんは、深く頭を下げ、思い出ぶかい山寺と老僧に別れを告げ、なつかしいわが家にむかったのです。

その頃、この三年の間、ねたり起たりの母は、一日千秋の思い出でわが子の帰りを待っておりしました。

「母さん、ただいま、具合いかがですか」

待ちに待ったわが子の声、そして元気そうな姿に、母は、涙を流してよろこびました。

「まあ、こんなに立派になって、生きていてよかった」

「いろいろ心配かけてごめんなさい、もう大丈夫です。」

これからは、うんと孝行させてもらいますからね」

母の容態は日ごとに快方に向い、やがて、もとのようにおだやかな姿にまで回復することができました。

その後の子僧さんの真面目な生活ぶりは、家のものはもちろん、相手にしなかった近所の人々にも驚異にうつりました。

「なに、そのうちにもとに戻るに決ってる」

こんな、かげ口をいわれながらも、一向に変わる気配はありません。それどころか、その言動は、つぎつぎに周囲の人々を感服させたのです。

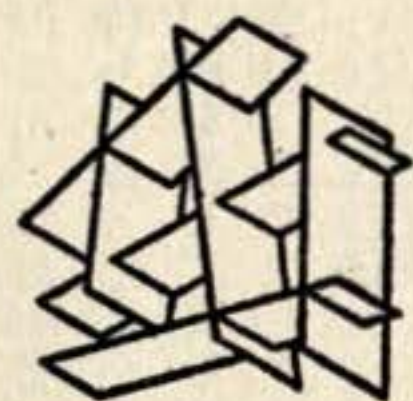
子僧さんにとって、この三年間は、三つの袋を得るための、それは貴重な時間だったのです。

この体験が血となり肉となって成長していった子僧さん、非の打ちどころない大人となりました。そして、世のため人のために、大いにその力を発揮いたしました。

あれほどまでにわが子の行く末を案じた母も、あまりにも立派になった子僧さんの言動を見聞し、ただただ感激し、感謝の日々を送り、長寿を完うし、やがてねむるがごとくに大往生を遂げました。

母をねんごろに供養した子僧さん、老僧から伝えられた金言を後世に伝えたいと考えました。そして、今や隆盛を極め、何等不安のないわが家をあとに、あの三つの袋を携え、旅に出たということです。

## 宇都宮一族のこと [四]



梶<sup>かじ</sup>村<sup>むら</sup> 昇<sup>のぼる</sup>

(亜細亜大学教授)

### (三) 宇都宮を訪ねて

宇都宮蓮生頼綱は、八十八歳の長寿を全うして、正元元年(一二五九)十一月に亡くなった。だが信生朝業の生涯については、何の記録もない。宇都宮家歴代の墓は、今、栃木県益子町大羽の地藏院の境内にある。ここは、頼綱、朝業の祖父であった朝綱の隠栖の地であった。祖父朝綱は、先にも書いたとおり、建久五年(一一九四)の公田横領事件に罪を得て、のち許されてから、ここに隠栖していたのである。朝綱は藤原北家の流れを吸み、は

じめ鳥羽院の武者所に属していたが、のちに御白河院の上北面の武士をつとめていた。源頼朝が兵を挙げると、ひそかに志を寄せ、頼朝のもとに参上し、そのため、のちに宇都宮二荒山神社社務職の相伝を認められ、伊賀国壬生郷の地頭職に補任されている。

二荒山神社は、今の宇都宮市の中心街にある。高い階段を登りつめたところに本殿がある。「うづ高き宮」である。これが「うつのみや」の語源であるという説があるそうだが、ゆかしい地名である。

朝綱の信仰については、不勉強で何も知るところがな

いが、「重阿弥」と号し、「寂心」という法名もあるところからみれば、浄土教の信者であつたと考えてもよいのではなからうか。朝綱は元久元年（一二〇四）に八十三歳で世を終っている。熊谷直実が法然の門に入つたのは、建久四年（一二九三）のことであるから、朝綱が浄土教の信者であっても、年代的には何のおかしいこともない。建久五年の事件で隠栖したということは、このときは発心したと考えてもよいのではなからうか。「重阿弥」という号が、何か浄土宗の阿号を思わせるものがある。益子町大羽の地藏院境内にある宇都宮氏歴代の墓には、苔むした古い五輪塔が、幾基も並んでいる。茫々八百年、人間の生死一夢の間という思いにかられる。

宇都宮氏の遺跡を訪ねて、市内をぶらぶらしていると、清巖寺という寺の前に、国宝・鉄塔姿という碑の立っているのが目に入った。由来を読んでみると、八代城主宇都宮貞綱が、亡母の十三回忌供養のために建てた鉄製の塔姿であるという。高さは三メートル三〇、幅は三〇センチ、重さは三百二十キロあり、日本でもっとも古いただ一つの鉄鑄の平塔姿だそうだ。正和元年（一二三一）の作というから、六百六十余年も経過している。最

上部に梵字キリクが書かれ、その下に弥陀三尊来迎図が浮彫され、その下に偈文、碑文がある。文字は磨滅して読めないところがあるが、幸いにして五分一縮図の版刷を住職より戴いたので、それによって全文をここに記しておく。それというのもこの版刷もはや無くなりそうだ、ということなので、活字にして残しておきたいと思つたからである。

まず、弥陀三尊の下の四行の偈は、

八葉白蓮一肘間  
炳現阿字素光色  
禪智俱入金剛縛  
超入如来寂靜智

これは龍樹の『菩提心論』（唐・不空訳）の一節である。下の碑文は、

夫母者四恩之先也孝者百行之源也因玆当三十三之忌景營率都姿之治鑄弥陀之種子三尊之聖容等祈先此之菩提則仰諸仏之照覽早出三六趣之

苦城ニ速生<sup>ニセ</sup>九品之浄台<sup>ニ</sup>乃至法 界平等利益敬白

正和元年<sup>壬子</sup>八月日孝子

という。最後の「孝子」の下は剝落して判読できない。孝子とは、貞綱のことであろう。貞綱は、正和三年（一二三六）に、興禅寺（現在、今泉町六丁目）を建立している。これは臨済宗妙心寺派に属しているが、この塔姿の碑文は浄土教信仰の表白であるといつてよい。清巖寺の中門の左手奥のところに、蓮生頼綱の墓がある。頼綱のことを書いてきて、漸く墓にめぐりあつたという気がする。法然上人が土佐に流罪になるときに、

流刑さらにうらみとすべからず。そのゆへは、齡すでに八旬にせまりぬ。たとひ師弟おなじみやこに住すとも、娑婆の離別ちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再会なむぞうたがはん。

と言われた。頼綱蓮生の墓は今ここにある。師法然上人の墓は京都にある。「たとひ山海をへだつとも、浄土の再会なむぞうたがはん」と思えば、何か心のやすまる思

いがする。

ところで、この頼綱の室は梶原景時の娘であるが、その人の甥が、『沙石集』の著者無住法師であるという。ことは、宇都宮へ来て初めて知った。清巖寺から南の方に、「おしどり塚」という高さ三メートルほどの六角塔がある。この塔の話が『沙石集』に載っている。

昔、一人の獵師が求食沼<sup>あきりぬま</sup>でおしどりの雄を射止め、その首を切り捨て、からだの方だけ家へ持ち帰った。翌日、彼はまた同じ場所で、こんどは雌鳥をうった。ところが、その雌鳥の羽の下を見ると、昨日射止めた雄鳥の首が、しっかりと抱きかかえられていた。はつとした獵師は、己れの殺生に心を痛め、ここにおしどり塚をつくり、塔をたて菩提を弔った

というのである。無住は、正治二年（一一七〇）梶原一家が滅びたのち、伯母を頼って宇都宮へ来て、里人からこの話を聞いて、のち『沙石集』に書いたのであらうといわれている。『沙石集』には、「大原問答」のことなどが書いてあるので、よく読んでいたが、著者の無住が臨済禅

の人だけに、「大原問答」のことも、何か禪宗的な理解の仕方であって、どうもしっくりしなかったが、この話を聞いて、急に身近な人のように感じられてきた。

市内を横切って西南の方へ行くと、ここに一向寺という時宗のお寺がある。このお寺は建治二年（一二七六）、第七代城主宗都宮景綱の開基にかかるものだそうである。景綱は、蓮倫と称し、頼綱の孫に当る人である。父の第六代泰綱、すなわち、頼綱の子は順蓮という。泰綱の弟、横田の城主頼業は蓮阿であり、景綱の子、すなわち、鉄塔姿を建てた第九代貞綱は蓮昇、弟の武茂の城主泰宗は蓮恵、貞綱の子第九代公綱は理蓮である。すべて蓮という法名をつけていることは、蓮のうてなに往生しようとする浄土思想の系譜を示しているものといえよう。

この第七代景綱の建てた一向寺に、「汗かき阿弥陀」といわれる銅鑄の阿弥陀坐像がある。実は、これはもとと一向寺にあったものではなく、第十二代城主満綱が、一向寺の四世忍阿上人を開山として、城内下河原に長楽寺を建立し、その本尊として作られたものが、その後の転変によって、現在一向寺に併合されているものだそうである。この像は、昔から、国家の吉凶異変の前兆

に、身体に汗をかいたように湿気を帯びると伝えられており、それで「汗かき阿弥陀」と一般に呼ばれているのだそうだが、それよりも、私にとって珍しいと思われたのは、この一メートルの坐像の襟もとから衣にかけて四七一の文字が刻まれ、とくに左襟に「設我得仏国中人天寿終之後」とあり、右襟に「三悪者不取正覚」と刻まれていることであつた。これはいうまでもなく、阿弥陀仏四十八願中の第二願である。第二願を經典によって示せば、

もしわれ仏を得たらんに、国中の天人寿終の後、また三悪道に更らば正覚をとりじ

ということになる。刻印の方は「復更」という文字が抜け、「三悪道」が「三悪者」となっているが、どうわけであるか、私にはよくわからない。しかし、これが第二願を記したものであることは、衣の文字の最後のところに、「第二願大旦那 藤原満綱 一向寺発起 忍阿上人」とあることによって明らかである。とすれば、これは刻んだときの誤りとみてよいであろう。

いうまでもなく、阿弥陀仏の四十八願の中の中心の願

は、第十八願の念仏往生の願である。失礼だが、専門の学者ならいざ知らず、一般には、第十八願以外の願について論ぜられることはほとんどないのである。それにもかかわらず、わざわざ「不更惡趣ふきようあくしゆの願」といわれる第二願が刻まれたということは、どういう意味があるのであろうか。

私は、宇都宮満綱のことを調べてみた。史料も少ないので詳しいことはわからないが、満綱の在任当時は応永年間（一三九四—一四二七）のことである。この仏像も後背に「応永十二年四月二日宇都宮満綱」の銘がある。世はまさに戦乱のさ中であつた。在地の百姓は、年貢の未進を責められ、諸方に「てうさん（逃散）」し、諸方の地頭名主にかくまれて帰らないという事態が頻発していった。満綱の治下の所領でも同様であり、彼はついに「人返し法」という掟をつくり、逃散した百姓をかくまうことを禁じ、もとの住所に追い返すことを規定したということがわかつた。それとこれとがどう結びつくのかはわからない。それでも考えてみれば、この第二願というのは、阿弥陀仏が、ある国土が崩壊するときにあたつて、その国の人々が、悪業の力に引かれて、地獄、餓鬼、畜

生の三惡道に落ちるのをあわれ愍んでたてられた願なのである。彼の所領の百姓が逃散するということは、国の崩壊を意味する。そのときに当り、逃散という悪業の力にひかれて百姓が三惡道に落ちることのないように、また、無事返ってきた人たちが惡道に落ちないように、との領主としての願いをこめて刻まれたものではないのだろうか。

私はこのようなことを想像し、思えば、阿弥陀仏の第十八願にばかり頼らずに、他の四十七の願にも目を開くべきであつたのだということを強く反省させられた。

頼綱の蒔いた念仏の種が、遺芳あまねく宇都宮一族にゆきわたり、今、なつかしく宇都宮の街を歩けることの不可思議さを思った次第である。そういえば、阿弥陀仏とは、阿は「無」であり、「弥陀」は「量る」の意味であるから、「（人智をもって）量ることのできない（ことに）目覚められた仏」が「阿弥陀仏」なのである。それは「（人智をもって）思議することのできない」ということにおいて、不可思議と同意義である。歴史の流れの不可思議さを感じて街を歩けたということは、それが、とりもなおさず、阿弥陀仏の光の中に生かされているということなのであろう。

（完）

『華嚴經』は、くわしくは『大方広仏華嚴經』といい、重要な大乘經典の一つである。このお経に基づいて、中国で隋の時代に華嚴宗という一宗が成立したほどである。そして、東大寺は日本における華嚴宗の総本山である。しかし、華嚴宗も、『華嚴經』も、共に民間に根を下したものととはならなかった。

『華嚴經』のサンスクリット完本は現存

(お)(経)(の)(へ)(一)(ジ)

華<sup>け</sup>

嚴<sup>ごん</sup>

經<sup>きょう</sup>

せず、ただ「十地品」と「入法界品」との二品のみがある。完本としては、チベット訳に一本、漢訳に六十巻本と八十巻本との二本がある。また、部分訳としては、漢訳に、「入法界品」のみの訳として四十巻本が、「十地品」は『十地經』という独立經典として訳出されている。

このお経は、大部であるが、始めからまとまってあったのではなく、紀元一世紀頃

から二・三世紀にわたって、少しずつできあがったものである。

『華嚴經』の構造は、六十巻本によれば、七カ処で、八回にわたって説法がなされ、三十四章からなっている。

『華嚴經』の内容は、仏陀の悟りをそのままあらわしたものであると言われている。そして、『華嚴經』が説く世界観は、時間的、空間的に無限な世界である。すな

わち一仏を中心にして、そのまわりに諸菩薩が囲み、一世界を形成しているが、そのような世界が無数に集まってできているのが、『華嚴經』の示す世界である。

ところで、この世界観は、当時のインド的世界観を示したものと考えられるが、現代の天文学が述べる宇宙説とよく似ている。我々の住む地球は太陽系に属しているが、その太陽系も銀河系に属し、その銀河

系の中には太陽系とよく似た世界がいくつもある。さらに銀河系も大宇宙の一部にすぎないであろうとするのが、現代科学の示す宇宙観である。

また、『華嚴經』では、「信はこれ道の元にして、功德の母なり」とか「初めて心を発す時に、便ち正覚を成ず」と述べ、「信」の意義が強調されている。仏教において、「信」は求道の基本であり、たえない求道は堅固な「信」によって支えられるのである。

『華嚴經』の中で、もっともよく知られているのは、「入法界品」の善財童子の求道物語であろう。二十人の女神・女性を含む五十三人の善知識を訪ね、求道の旅を続けたという話である。東海道の五十三次は、この物語になぞらえたものといわれている。また、東大寺の善財童人の求道の旅に出る合掌の姿をした彫像は、なんとも、ほえましくて、かわいらしいものである。なお、「華嚴」という言葉は、日光の「華嚴の滝」などの地名として、聞いている人も多いであろう。

(K)



# 念佛ひじり三國志

(三)

——法然をめぐる人々——

## 寺内大吉

挿絵 松濤達文画

### 一

俊乗房重源が来訪者たちへ向ける視線に親愛感はなかった。とりわけ初対面の幸西や行空には冷気をふくんでいた。法然との師弟関係を、会話のつなぎ目に刺すように問いただすのである。

法然を師とかがたって、お前らを何を企らんでいるのか。法然の気持は裏の裏まで知りぬいているんだぞ、と言いたげでもある。

幸西は老人のそんな眼を無視して、新宗団結成の構想

をしやべりまくった。念仏ひじりが大同団結し専修念仏を天下に弘布すべきである、と主張する。

「九条関白殿（兼実）のお言葉では、現主上（後鳥羽帝）も専修念仏を篤くご信仰との由、この新宗団を国教とし、あまねく念仏を唱えさせることがわれらの使命と信じます」

「専修念仏を国教にするというのか」

「さよう。今日の勢威を以てすれば、天下はすべて専修念仏になびくことでございましょう」

「主上が専修念仏を信仰されると申すが、神祇はどうな

るのかな」

「神祇なぞ、すでに西海の藻屑となって消えました」

幸西は大胆に言いきる。

「天朝は、この国古来の神々をあがめて来られた。仏法もこの敬仏思想に溶けこんで発展してきたと言える。主上が専修念仏者となつて、ご先祖の神々を捨てることがあり得るだろうか」

「すでに三種の神器が喪われた現在、主上が頼るべき神祇のあかしは存在しておりませぬ。形式と習慣が残っているだけでしょう」

平家が西海へ逃亡した折、皇位継承の象徴たる三種の神器は持ち去られた。しかも壇ノ浦で安德帝が入水され、るとともに三種の神器も海底へ消え去った。

天子もただの人間……いや、と幸西は語気を強くした。

「すぐれた仏者への道を選んで良いはずです。すぐれた仏者とは、脇目も振らず専修念仏に帰依することです」「なるほど」

重源はうなずいた。

ラジカルな論理ではあった。しかし重源自身は法然の

## 前号のあらすじ

旧邸に佇む成覚房幸西に声をかけてきたのは範宴という常行三昧堂の堂僧、のちの親鸞聖人である。叡山への道すがら幸西は法然上人から受けた感銘冷めやらぬ調子で、滔々と阿彌陀仏の教えを若き日の親鸞に説いて聞かせた。罪深い人間にこそ救いの手を差し伸べるという阿彌陀仏。かつて阿彌陀仏をこのように理解し、それを説いたのは、唐の善導大師と法然御坊だけである、とも幸西は言う。親鸞にとつては、常行三昧堂で本尊の阿彌陀仏に二十年近く給仕してきたにもかかわらず、初めて聞く教えであった。

ひと月後、幸西は行空や安楽、住蓮とともに、東大寺に俊乗房重源を訪ねた。新しく専修念仏宗を興すためには、重源の力が是非とも必要であった。重源は、法然上人の使者と言いながら、なんらの書面を持たぬ彼らを不審そうに眺めた。

念仏を信奉する以上、説得の論拠は承服した恰好である。

「それで、新しき宗団の本尊仏は？」

重源は念を押してきた。

「言わずと知れた阿彌陀仏、一尊にございます」

「一尊だけか」

「専修念仏でございます」

「他の諸仏諸菩薩をあがめたてまつることは不可かな」

「さようで。認めぬのは当然でありましょう」

「みんな駄目か。釈尊も？」

「念仏者としての釈尊は覚者ですが、それ以外の法を説く釈尊は、われらと無縁、それどころか邪法の覚者ということになるでしょう」

「釈尊が邪法の覚者か。なかなかきびしいのう」

重源は老いた口もとに寂しげな笑みを浮かべた。

笑みの内容を適確に読みとおすだけの「明」が成覚房幸西にはなかったようである。

「先々のことは別ですが、新宗団設立の現下ではすべてを明確にしておかねばならない。曖昧は許されません。

誤解を招くし、専修念仏の純粹さが失われてしまう」

「純粹さか。この国の人間は何もかも「純粹さ」だ。この国の川は澄んでいるからのう」

「どういうことですか、それは？」

「わしは再度にわたって宋へ出かけた。あちらの河を見てきた。みんな濁っていた。濁っているので大きかった」

「国土が広いからでしょう」

「それもある。だが、濁った水で育った人間の心は大きい。宋の人間たちは、みんな広い心を持っている」

「あなたは何が言いたいのですか」

「わしなぞはな、その純粹な新しき宗団に加わる資格がないということじゃ。八十年の生涯を傾けて、わしは造寺造仏に奔命してきたわけだからな。沢山の阿弥陀仏も造った。だがそれ以上の数の諸仏諸菩薩も復元、造仏している」

「これまでのことは忘れるのです。今から新しく専修念仏者として……」

思想革命に踏み切るべきだ、と幸西はまくし立てる。

重源は悲しげに表情を結んだ。

「八十年の生涯を、忘れろと言うのか。これまでやってきたことはすべて無意味で……違う。あんた、それは間違っている」

老ひじりの悲痛な叫び声を法本房行空がさえぎった。

「宋の国から称名念仏を持ち帰ったのは重源どの、あなた自身ではないですか。みずから南無阿弥陀仏と号して、法然御房ともどもに念仏をひろめられた。その元祖でもある重源どのが、聖道門と妥協されるなぞ考えられませぬ」

「それで、わしに何をせよと言われるのかな」

行空を無視して重源は、幸西に視線をそそいだ。やはり新宗団設立の首謀者をこの男とにらんだのであろう。

「重源どのはもちろん、配下のひじりたちを糾合して、この新宗団へ加わって頂きたいのです」

「今も申したように、わしはおぬしらのように純粹ではない。それと、配下など誰一人、持ってはおらぬ」

ご冗談を、と言いたげな顔で、

「あなたが阿弥陀号を与えたひじり、これすべて門弟でしようが」

と幸西はきめつけようとする。

「いやいや。わしとは無関係で阿弥陀を名乗る者も沢山いる。のう、そこにいる、何とか申したな、おぬしは」

「空阿弥陀でございます」

馬粥はちよつと恥入るように顔を伏せた。

四天王寺の西門で信阿弥陀仏と知り合い、空阿弥陀号は彼から進められたもので、重源とはかかわっていないかった。

「わしが同じ空阿弥陀号を与えたのは高野の明遍僧都なのじゃ」

どちらがホンモノ、ニセモノと言うのではなさそうで

ある。阿弥陀号を名乗る者が必ずしも自分の配下門弟ではない、と主張している。

「しかし、重源どのがひと声、号令をかければ」

彼らは追隨してくるであらう、と幸西は喰い下がった。有能なオルガナイザー特有の粘りである。

重源はもはや会談に疲れ切っている様子だった。

とにかく古い先は短い。残した仕事も沢山ある。

「……このことは法然の御房からとくと意中を伺いたい」

と逃げた。

幸西らの重源説得は失敗に終わったとみていいであらう。

## 二

その晩、幸西らの一行は奈良の街に泊った。宿は「昆布ノ長者」宅をえらんだ。

以前は興福寺の衆徒で住蓮房の仲間だった。還俗して、紀州の海浜から昆布を奈良へ運びこんで商っていた。ただ売りさばくだけでなく、味付けに妙法を得て同業者間にぬきんでた。たちまち産を成して「長者」と呼

ばれる身分になった。

春日大社の裏手に豪荘な邸宅をかまえていた。住蓮房が旧好を通じると、昆布ノ長者は大悦びで、一行を迎え入れたのである。

贅をつくした晩餐が用意された。住蓮房はしきりと念仏者の天下が間近に迫っている時勢を長者に説いた。商機に敏い長者は、その時勢のなかから何かを掴み取ろうと、次々に質問を発する。晩餐の座に活気があふれた。

そんな俗談をよそに、安楽房は幸西に真剣な表情で念仏の本義を問いただしている。

「さっき、勸進上人(重源)に向っておぬしは南無阿弥陀仏の話をしたな。南無阿弥陀仏が西域の言葉であると、ほんとうか」

「いかにも。善導の観經疏にも明確に書いてある。南無阿弥陀仏とは西国の言葉。唐語に訳さば帰命無量寿如来じゃ」

「西域とは天竺か」

「違う。もっと西じゃ。紅毛ノ国じゃ」

「紅毛か。では釈尊とは違う国なのだな」

「いや、釈尊の教えが天竺からその西方へひろがってゆ

き、新しき思想が生まれたのだと思う」

「そこは、どんな国か」

「沙漠じゃ」

「沙漠……」

「一本一草もない砂の平原らしい」

「人間が住めるのか」

「一所に定住は出来ぬようだ。羊を追って旅暮しというところだ」

「その連中が南無阿弥陀仏を唱えはじめたのか」

「彼らの口から唐へ流れ伝えられた。当初は辺境でしか唱えられなんだ。それを中原へ導き入れ、唐全土へひろめられたのが善導大師じゃ」

当時、この国の僧ひじりたちに西域の知識はなかった。幸西とても足で踏破したわけではなかった。經典や唐書からの知識であった。

幸西が法然と会って、まづ先に感動したのは、法然があたかも数十度もかの地に足を踏み入れた如く、該博な西域に関する知識を保有していることであった。

法然の仏教知識は、現代流の表現をかりれば、広い国際視野に立ってのものだったことだ。

俊乗房重源が入宋に際して、法然から浄土教の知識を与えられた。現地で裏付けを取って来るように依頼されたが、それはただの浄土五祖に関する裏付けだけではなかったはずだ。西域から流入したこの宗教思想が、いかに中国の全土にひろがったか、そこまでの基礎知識を植えつけられ、中国の各地を歩いた重源が、法然の知識に寸分の誤まりもなかったことを確認したからに違いない。「紅毛の人々は異教を信ずると聞くが、異教と念仏とどこが違うのか」

安楽房は質問をつないだ。

異教、とはキリスト教のことである。阿弥陀仏の救済だけを願う浄土教と、キリストの愛を渴仰する異教とは同質の宗教ではないのか、と問いただしてくる。

「いや、その点をわしも法然御房にたずねたことがある」「どう言われたか」

「はっきりと異質だと断言されたぞ。異教ではな、人間を罪の子ときめつける。つまりわれわれがこの世に誕生したこと自体を罪悪とする。だから人間の一生は罪の償いのためにある。罪を償って、許されて死とともに天国へ昇天するのだ。その点浄土教は……」

「浄土教は？」

「罪の子ではない。仏性、つまり善にして透明な仏の子なのじゃ。ただし、生きざまのなかで煩惱を身につけてしまい、愚者と化してしまふ。その愚かさを、阿弥陀如来の慈悲によって救われる。いわば、人間の生い立ちへの考え方が、浄土教と異教とは根本的に異質である、と法然御房はおっしゃっている」

その論拠として、幸西は女体だけが蔵する子宮の呼称を引用した。

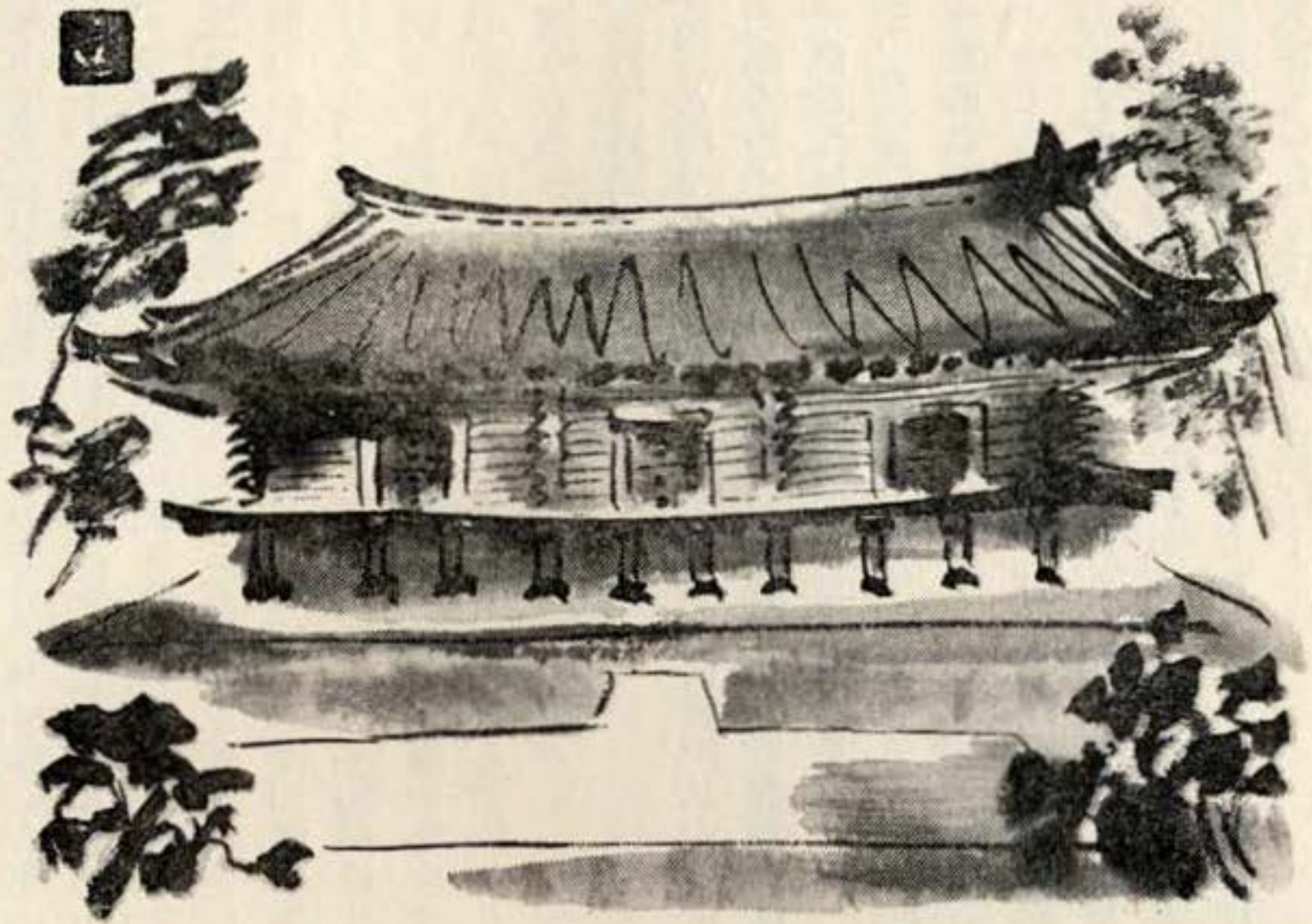
仏教では胎児が育まれるこの臓器を「子宮」と呼んだ。子供の宮殿、パラダイスだ。つまり仏の子が出来る浄土なのである。キリスト思想を主軸におく西欧ではヒステリー、忌まわしい女性の狂気、それを呼んでいる。

安楽房は、この成覚房幸西の博学多識ぶりに舌を巻くばかりである。博学だけではない。鋭敏な学殖感覚は新時代を荷負うにふさわしいリーダーだと信じた。

もの静かな幸西と安楽房との会話をよそに、旧好をあたためる住蓮房と昆布の長者のやりとりは酒気にも煽情されて高唱放逸になってゆく。

「おぬしも忘れまいが、大仏殿炎上の日のことを」

## <正倉院>



昆布ノ長者がなつかしげに眼をしばたたかせる。

「うむ。いまだに夢寝であの炎を見る」

「わしはあのととき、急ぎ命ぜられて雙倉（ならびぐら）の警固に走った。おぬしは何処の部署か」

「部署もへちまもあるものか。金堂へ平氏の軍勢がなだれこんだので敵味方もわからず、斬り結び、あとは奔流に押し流されて……」

昆布ノ長者が警固したという雙倉とは、朝廷の宝物をおさめた勅封の倉、正倉院のことだった。

「雙倉はたしか無事であったな」

「うむ。結果としては兵火をかぶらなんだ。しかし攻め寄せた軍勢はひと揉みに焼き滅ぼさん気色であったぞ」  
三位中将重衡の手勢は、東大寺、興福寺の衆徒を限りなく憎悪していた。僧兵の影さえ見れば容赦なく攻めかかった。僧兵が立ちこもる堂塔伽藍には見境もなく火を放った。勅封の正倉院とて例外ではなかったはずだ、と昆布ノ長者は証言する。

正倉院は奈良朝、光明皇后や聖武天皇が唐より渡来の武具や薬物、また高価な什器類を収納した「歴史の倉庫」であった。今日現存する一万点近いその宝物も、治

承の動乱時まさしく烏有に帰する一大ピンチにさらされたと言っている。

「平氏の軍勢がまっしぐらにわれら目がけて突入してきたときだ。ひとりの騎者が仲へ割っていいいった」

「騎者が……それは平氏の？」

「さよう。侍大将と見た。騎者は大音声でさえぎった。

ここはならぬ。この倉は貴き御物を収納した倉だ。手をかけるな」

「それだけでおさまったかな」

「無論、制禦しきれぬ。しかし騎者は智恵ある男でな。

かえす言葉をわしらに向けた。戦火は憎悪のなかで大きくなる。衆徒らもこの場を去れ。われらも去るであろう」  
憎い僧兵が守っているから正倉院も焼かれる。だから僧兵もこの場を去ってくれ、そうすれば自分らもこの建物を見すごして去るであろう、と敵味方を説得したというのである。

「まこと立派な侍大将であった。わしは生涯、あの騎者の顔を見忘れぬつもりじゃ」

昆布ノ長者はそう言いながら視線を、住蓮房のかたわらに坐る馬粥——空阿弥陀仏へうつした。ハッと胸を衝

かれたように表情が動いた。しかし、すぐに思いを転じて、

「おぬし……いや、おぬしと顔つきが似た騎者じゃった」  
自らに言いふくめるように昆布ノ長者はうなずいている。

あの正倉院を救った侍大将が、生き永らえてこんな席にいる道理がない——昆布ノ長者の「常識」であった。

空阿弥陀仏は黙したまま臉を伏せている。

つい昨日の出来事のように思い出される。あの正倉院の前へおどり出ていった行動。

無我夢中だった。この建物だけには火を放ってはいならぬ。それだけの一念で敵味方のなかへ割ってはいったのだ。

「動乱の世にあっても、一人の人間の決断が、だいじな物を守ってくれることになる」

昆布ノ長者はしみじみとした口調にかえった。

### 三

成覚房幸西たちの説得を受納せず、門下の高野ひじりたちを専修念仏宗に同流させなかった俊乗房重源。

重源がこの点について盟主法然の真意をただしたかどうか。おそらく重源はその後一度も東山禅室に法然を訪ねていないはずである。

老朽化した健康もおもな理由になるが、だからと言って有力な門弟を送りこんでもいない。

長い法然との同信朋友関係において、重源はこんな諦め方をしたのではあるまいか。

法然も老いて病身となった。彼自身の意志とは無関係で、ああした過激な念仏ひじりたちが門中で育ち、肥大化してしまった。もはや法然自身の手ではいかにも制禦しきれなくなった。

これも時勢、と言うものであろうか。

諦らめた、とは言ってもラジカルな幸西ら念仏ひじりの印象だけは心ある知己に伝えたことであらう。おのれ八十年の生涯を傾けた造寺造仏を虚無にしてしまう専修念仏思想は何としても許しがたかったからである。

心ある知己。その筆頭に笠置の解脱房がいたことは充分に考え得る。

解脱房が書いたと言う「興福寺奏状」が、専修念仏衆の組織教線上の機会を知りつくし、その弱点をいちいち

衝いてくるあたり、内部告発の匂いが濃厚だからである。もちろんその内部告発者が俊乗房重源ひとりとは断じ難い。この奏状が公開されたころ、重源はすでに生涯を閉じつつあったのである。重源とその周囲、と複数で名差しておいた方が適當のように思われる。

「興福寺奏状」は、元久二年九月（一二〇五）南都興福寺の衆徒によって院に訴え出た告訴状である。専修念仏の非を九箇条にわたって鳴らし、念仏禁断を要求したものである。

その九つの非失とは、第一が「新宗を立てる失」である。日本には奈良朝で六つの宗派、平安初頭に天台、真言、と八宗の既成宗団が実在する。いずれも祖師は入唐して、大陸で師資相承を受け、この国へつたえたものである。ところが法然は入唐もせず、面受による師資相承も果たしていない。それが念仏宗などと新しき宗団を呼称するのは不当の限りである。

第二が「新像を図する失」である。

専修念仏者は攝取不捨曼陀羅をかかげ、阿弥陀如来の慈悲が念仏者だけに直射することを説く。旧来の諸仏諸菩薩を全く無視しているのは不当である。

## ＜興福寺の衆徒＞



この項などは、俊乗源重源の主張をそのまま表現している感だ。

### 第三が「釈尊を軽んずる失」

ここでは西域に発した称名念仏が、印度の釈尊を軽ろんずる思想だ、と言いたげである。

### 第四の「万善を妨ぐる失」

専修念仏を主張する余り、他の聖道行をすべて無視するばかりか、邪義だと言いつのる過激思想を鳴らしている。

### 第五の「靈神にそむく失」

日本の神祇神道を無視し、皇祖皇宗思想を踏みにじる、と責めためる。

第六の「浄土に暗き失」は浄土思想を余りにも狹隘な地帯でとらえ、とりわけ下品下生の無知なる者の救済を強調する余り、修行努力した上品上生の信者を捨てる過程を指摘している。

第七の「念仏を誤まるの失」も称名念仏を強調する偏向の弱点をえぐっている。念仏には、口称もあれば心念もある。口称だけをすぐれたとするのは間違いである。

### 第八の「釈衆を損ずるの失」

専修念仏はギャンブルや女犯を惡徳としない、少くとも往生の妨げとはならぬ、と言うが、これは破戒を許すことで俗大衆の歡心を買う以外の何ものでもない、と非難する。

#### 第九の「国土を乱すの失」

専修念仏でこの日本国をおおい尽くし、政權まで掌中にしようと企んでいる。まことに危険な宗教思想というほかはない。

さらに副え状として――、

法然はさきに怠状(詫び証文)を提出して、門弟の過激な行動を誠にめてはいるが、いっこうに改める氣配はなく、門弟の一部には「上人の詞、皆表裏あり。中心を知らず。外聞にこだわるなかれ」と檄を道俗に飛ばしている現状だ。専修念仏の徒の邪見、利口は改むる誠意がない、と考えねばならぬ。

と、弾劾しているのである。

法然の人格、行状から思考すればこの弾劾は不当、マト外ずれとも取られる。興福寺衆徒の横車、ということになる。

しかし、そのような曲解を招く言動が門弟の一部に散

存した事実からも眼をそむけてはならない。たしかに建久九年(一一九八)を境として数年間における念仏ひじりたちの行動は激越であった。法然の意志にそむいて暴走しつつあった。

旧体制側、聖道教団の憂慮、不安を見すごすことは出来ぬのである。

現実に、俊乗房重源のように穩健な念仏ひじりたちはラジカルな専修念仏の徒と袂をわかつている。

浄土宗の立教開宗を、この建久末年時よりさらにさかのぼって、比叡山を下った承安五年(一一七五)とした意味も、これらの事実を踏んまえてのことであろうか。成覚房幸西ら過激な念仏ひじりたちの「法然擁立」を意識的に無視したのであろうか。

しかし、法然が専修念仏思想を新しき宗団として行動し、宣布したのはまさしくこの時機において他にない。いわんや三昧発得で宗祖となる公的な回心を体験し、夢感の二祖対面で師資相承も果たしているのである。

これらを後世の「造事」と抹殺するならいざ知らず、立教開宗の資料に収納する以上は、浄土教団の設立を建久九年時に定めるのが正確であろう。

ところでこの時期、法然門中の上足として聖光房弁長  
の名がある事実を、前にも紹介した。

聖光は幸西と同門のライバル、しかも法然傘下への入門年次もほぼ同じである。ということは法然が比叡山から下って東山に禅室を結んだ当時からの門弟ではない。

最も新しい年次の弟子であり、それは新宗団の結成と密接に関連している。

法然が、幸西や聖光を受け入れた背景として、われわれは彼らの師宝地房証真と法然の関係を注目しておかねばならない。

「四十八巻伝」はこんな逸話を挿入している。

あるとき、法然は九条兼実邸でひとりの山僧（比叡山在籍の僧）と出会った。僧はいきなり法然に疑問をぶつけてきた。

——専修念仏を、新たに浄土宗と名づけられたそうだが、それは何を根拠としたものであるか。

法然は静かに答えた。

——唐、善導大師の観経疏によるものです。その付属文です。

——それだけであるか。

——それだけです。

——部宗義を立てるというのに、そんな一文だけでよいのであろうか。

と追究したが、法然は微笑むだけで答えようとはしなかった。

山僧は比叡山へ帰ると宝地房法印証真にこの旨を告げた。法然とはじつに軽はずみな男だ。善導の短い一文だけで新宗団浄土宗を立宗しようとしている。

しかし宝地房はこの山僧をたしなめた。

「法然房は天台はおろか、八宗すべての奥義をきわめた人だ。その法然房が短い一文から新しい宗団の設立を思い立たれたのは決して誤まりではない」

やたらと資料ばかりを堆積し、一見ではわからぬように複雑にすることこそニセモノというものだ、とさとしたのである。

信仰、思想こそ異なれ、宝地房証真が法然に心酔し、かつその行動に全幅の信頼をおいた事実を物語る。

その心酔と信頼があったからこそ、愛弟子の聖光房弁長が比叡山を捨てて東山の法然禅室へ入門することを許したのであった。

（つづく）

# 舞 見 お 中 暑

|                                                               |                                                               |                                           |                                                                     |
|---------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <p>〒170<br/>東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一<br/>大正大学<br/>電話(〇三)九一八―七三二―代表</p> | <p>〒603<br/>京都市北区紫野北花ノ坊町九六<br/>佛教大学<br/>電話(〇七五)四九一―二二四―代表</p> | <p>京都家政短期大学<br/>大橋 俊 有</p>                | <p>淑徳短期大学<br/>学長 長谷川 良昭<br/>東京都板橋区前野町五―三―七</p>                      |
| <p>埼玉工業大学<br/>松川 文 豪</p>                                      | <p>鎮西高等学校長<br/>真和中・高等学校長<br/>上田 祐 規<br/>熊本市九品寺三―一―一</p>       | <p>東山学園</p>                               | <p>東海高等学校長<br/>滝 俊 立<br/>〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職<br/>社会福祉法人 神守保育園理事長</p> |
| <p>蓮勝寺住職<br/>柴田 敏 夫</p>                                       | <p>だん王法林寺<br/>信ヶ原 良 文<br/>京都・三条大橋東詰</p>                       | <p>光明寺住職<br/>白 幡 憲 佑<br/>横浜市南区庚台(久保山)</p> | <p>西 住 院<br/>戸 川 靈 俊<br/>京都市左京区黒谷町三〇</p>                            |

# 舞 見 お 中 暑

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方  
中国従貫道路大阪より二時間

東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部 仙順

浄土宗会議員

瀧沢 教夫

山梨市市川 龍泉寺

稲田 稔界

日中友好浄土宗協会副理事長

安国寺住職

大田 秀三

小林 忍戒

京都市下京区寺町

仏光寺上ル 聖光寺

晴雲寺住職

塚田 弘導

〒254 平塚市立野町六―五

回向院

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二―八―十

世間虚仮 唯仏是真―聖徳太子―  
栃木教区教区長

長田 善弘

今市市大桑町二七〇法蔵寺中  
電話(〇二八八)二一―八二二〇

浄土宗近畿地方教化センター委員長

浄土宗大阪教区長

漆間 純成

九品仏浄真寺

清水 順碩

専念寺

俵口 隆成

大阪市北区東寺町十一 九品寺中

東京都世田谷区奥沢

京都市左京区西寺町仁王門上ル

# 舞 見 お 中 暑

|                                                                 |                                                                      |                                                                     |                                                      |
|-----------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| <p>保元寺</p> <p>里見達人</p> <p>東京都台東区橋場一―四―七</p>                     | <p>称名寺住職</p> <p>須藤隆仙</p> <p>〒040 函館市船見町一八―一四<br/>電話(〇一三八)二二―一五七八</p> | <p>中島真哉</p> <p>青山梅窓院</p> <p>東京都港区青山二―二八―三八</p>                      | <p>東京都文京区小石川三―一四―六</p> <p>無量山伝通院</p> <p>住職 大河内秀敏</p> |
| <p>〒151<br/>東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一</p> <p>清岸寺</p> <p>原口徳正</p>          | <p>華陽院</p> <p>堀田良謙</p> <p>〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八<br/>電話(〇五四二)五二―三六七三</p>  | <p>近龍寺住職</p> <p>松濤弘道</p> <p>〒328 栃木市万町二二―一四<br/>電話(〇二八二)二二―〇八〇二</p> | <p>光運寺</p> <p>飯田信弘</p> <p>四日市市中部三―一二</p>             |
| <p>野呂幸進</p> <p>教安寺</p> <p>川崎市川崎区小川町六番地二<br/>電話(〇四四)二二二―四九四六</p> | <p>金田明進</p> <p>〒302 取手市白山二―九―二八<br/>弘経寺</p>                          | <p>北川一有</p> <p>〒111 東京都台東区鳥越二―一三六<br/>長寿院</p>                       | <p>法然上人鑽仰会</p>                                       |

## 二 編集後記 二

○「野に咲く花の名前は知らない だけ  
ど、野に咲く花が好き……」（はしだのりひ  
ことシューベルツ「戦争は知らない」より）——  
古いレコードからこんな歌を聴いて、なぜ  
か突然驚いてしまった。さわやかなフォー  
クソングの一節。それは、北山修という才  
人の発した多くの詩語の中のほんの一行の  
言葉であるが、妙に私の心を把えて離さな  
い。複雑な人間模様のせわしなさの中で、  
しかも今は猛暑の真夏、汗みどろになって  
忙しく働いていると、ともすれば素直な  
心、素朴な心を忘れてしまう私たちは、時  
に詩人のようなさわやかな軽快な心に啞然  
とした感動を覚えるのかもしれない。しか  
し、それにしても若者たちが、こうした歌  
を素直に歌って、素朴な人生を歩んでくれ  
ればそれに越したことはないのだが……。  
○弊会編集部にも、浄土念仏信仰の実践に  
怠りのない方々から、その教化努力の実際

の足跡が各種のパンフレットや文書によつ  
て送られてくるが、その一々を広く紹介す  
る誌面がないのが残念なほどである。その  
中でも、今回届けられた『挙身微笑』とい  
う大冊は、編集子の心をとくに強く打った  
感動的な書物であった。これは、天理市和  
蘭町の善福寺住職竹田英宣上人が、奥様八  
千代夫人の三回忌にちなんで作られた追悼  
の文集であるが、亡き奥様への愛ひとすじ  
のあまりある想いを、A5判二五〇ページ  
の豪華本にまとめられた熱い気持ちは、は  
るか遠く、故人とはなんの面識もない私の  
ようなものまでも及んでくるのである。  
故夫人のご冥福を心から念ずるとともに、  
竹田上人には奥様の分までご健勝に、今後  
も念仏実践の指導者として広くご活躍願  
いたい、と思うのである。

○さて、お盆の句から、左の二句を選ぶ。  
きやうだいの縁うすかりし墓参かな

万太郎

墓洗ふ母とわれの手相触れて

林火

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十四巻 八月号

昭和十年五月二日  
第三種郵便物認可

昭和五十三年 七月二十五日 印刷  
昭和五十三年 八月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦  
発行人 佐藤 密雄  
印刷人 関 二三男  
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

# 舞 見 お 中 暑

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

西福寺

稻岡 覺順

川口市西川口三一二四

法主 大野法道

大本山 増上寺

大本山 光明寺

法主 石井真峯

滋賀 福泉寺  
敦賀 西福寺

鵜飼 隆玄

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤 密雄

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

大本山 清浄華院

法主 高畠寛我

浄土宗 宗務庁

祐天寺

浄土宗 宗務支所

巖谷 勝雄